

4. 青年海外協力隊（エクアドル）の活動の報告

○増尾 美帆（関西福祉大学看護学部）

I. はじめに

青年海外協力隊のイメージは、開発途上国の人々の生活に少しでも役に立ちたい、人々を救いたい等の熱い気持ちを持つ人が参加していると捉えられているのが一般的であると考えます。

しかし私の場合には、南米に行きたい、日本以外で看護師として働いてみたいということを友人に話していたら、青年海外協力隊を薦められ、青年海外協力隊とは何かということもあまり知らずに応募した。本当に安易な動機から参加した青年海外協力隊であった。

派遣前の訓練時に派遣国の言語、青年海外協力隊事業のこと、政府開発援助のこと等を学んだ。青年海外協力隊の目的を「開発途上国の新しい国づくりに貢献する」と習ったときに、私にとってはあまりにも大きな目的で達成するための方法論がでてこなかった。ただ、看護師として派遣される以上、ボランティアとはいえ看護師としての責務を果たすことが大切であると考え活動を行った。その活動の一部を紹介し、海外や青年海外協力隊に興味がある人の少しでも参考になればとよいと考え報告する。

II. 派遣先の概要

エクアドルの首都キト市北西の低所得者住居地にあるフランス人カトリック宣教師の援助によって設立された診療所で、スタッフは、医師6名、看護助手3名（3ヶ月程度の基礎看護コースを受講したもの）であった。

III. 活動内容

依頼された役割は、看護助手への看護技術・知識の提供、地域住民に対する健康教育等であった。

派遣期間2年間（2004年7月～2006年7月）の内、1年目は依頼された役割を踏まえながら診療所内の問題をみつけ、《衛生管理の改善》《看護技術の向上》《住民への健康教育》《外来看護の質の向上》の4つを中心に看護助手達の教育・指導を行った。2年目は、1年目の改善が十分にできなかったことを進めつつ、診療所内での《調整役としての活動》をし、医師と看護助手、看護助手同士の人間関係の調整や、改善できたことを継続していくための方法を模索し、実施した。また、活動を進めていくには、上司に現状と評価、要望等の報告書（スペイン語で記載）を毎月提出したり、診療所内のスタッフ全員と関わり、現状の問題点等を話し合った。

IV. まとめ

2年間の活動の経験から、技術や知識を教えることは容易いが、清潔・不潔等の目に見えないことの概念を理解してもらうことや習慣を変えることの難しさを実感した。また、看護助手達の人間関係を円滑にすることに非常に時間と労力を要したが、人間関係が良好であれば多くの問題が解決された。

隊員として、その国に貢献できたといえるものは非常に少ないが、活動することによって多くのことを私が学ばせてもらったと考えている。教えているようで教えられ、ケアしているようでケアされている等、人との関係は相互作用であること、決して一方的ではないこと、この当たり前のようなことが深く心に感じられた。経験で得たことを他者に伝えていくことで、これから海外へと考えている人の役に立てるよう努力したいと考えている。